



記憶の場としてのリュトリ : 文学作品によるアルプスの神話化と脱神話化

増本, 浩子

(Citation)

DA, 13:76-88

(Issue Date)

2018

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011281>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011281>



記憶の場としてのリュトリ —文学作品によるアルプスの神話化と脱神話化—

増 本 浩 子

1

リュトリ (Rütli) はリュトリの野 (Rütliwiese) と呼ばれ、何も知らなければ湖畔ののどかな牧草地にしか見えない場所なのだが、実際にはスイス人にとっての聖地である。なぜならば、ここがスイス発祥の地とされているからである。リュトリでは毎年 8 月 1 日の建国記念日に式典が開催される。

スイス建国は 1291 年、それぞれ主権を持った 3 つの原初カントン (州) の住民が、この地域で支配力を強めてきたハプスブルク家に対抗して、自分たちの自由と独立を守るために相互扶助の同盟を結び、盟約者団 (Eidgenossenschaft) を結成したことにさかのぼる。これに周辺のカントンが徐々に加盟していくことによって、現在のスイス連邦が形成された。盟約者団という名称は今でも正式国名として用いられ、小国家の集合体として徹底した地域主義に基づく連邦制をとっているのも、建国の精神に由来する。そして、最初に同盟の誓い (Eid) を立てた場所がルツェルン湖¹の左岸、ウーリ州ゼーリスベルクにあるリュトリの野とされているのである。

ルツェルン湖はスイスの中央、アイガーやユングフラウを擁するベルナー・オーバーラントの東側に位置している。ドイツ語名は Vierwaldstättersee で、ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデンの原初 3 州とルツェルンの、合計 4 州に面していることからこう呼ばれる (ルツェルンは最も早く盟約者団に加盟したカントンのひとつである)。「四森林州湖」と訳されることもあるこの湖は、ウーリ州からティチーノ州へと抜けるザンクト・ゴットハルト峠と並んで、1291 年に成立した盟約者団の換喩として用いられることも多い。つまり、今日のスイスでは通常、自国の発祥の地を表現するのにリュトリの野、ルツェルン湖、ザンクト・ゴットハルト峠といった、原初 3 州に実在する場所が用いられるのである。現代のスイス人にとって、ナショナル・アイデンティティを支える建国の物語と深く結びついた国民的なく記憶の場²が、公的建造物ではなく野 (牧草地)、湖、アルプスの峠、といった自然環

* 本稿は科学研究費補助金基盤研究 (B) 「ナチス時代のスイスと精神的国土防衛—「順応と抵抗」をめぐる文化の政治を軸に」 (研究代表者: 葉柳和則、課題番号 16H03400) の助成を受けて執筆された。

¹ スイスではリュトリはウルナー湖畔にあると表現されることが多いが、ウルナー湖 (ウルナーは「ウーリの」という意味) はルツェルン湖の一部である。

² フランスの歴史学者ピエール・ノラ (Pierre Nora) によって提唱され、ドイツ語圏ではアライダ・アスマン (Aleida Assmann) の著作によっても知られる「記憶の場」(lieu de mémoire / Erinnerungsort) の概念は、地理的な「場所」だけを指すものではなく、ある社会的集団の集合的記憶と結びついた神話的形象や歴史的事件、制度、書物、芸術作品などをも含みこむ包括的な概

境であることにも留意する必要があるだろう。これは、高い山々の連なりとその裾野に広がる牧草地や湖といったアルプスの風景が少なくとも 18 世紀以降、スイスの象徴となっていることとも無縁ではないと思われる。

ルツェルン出身の作家ペーター・ビクセル (Peter Bichsel, 1935 年生まれ) は 1967 年に発表したエッセイで、外国で自分がスイス人だとわかるとたいいていの人が敬意を払ってくれるし、スイスが「非常に美しい」(wunderschön)³ 国だとほめてくれると述べた後、そう言われたときのスイス人の心情について次のように説明している。

私たちはこれをお世辞だとは思わない。私たち自身もスイスが非常に美しい国だと思っているからである。こう言われるのを聞くとき、私たちは風景のことだけではなく、国そのもののことも考えている。風景に限定するとしても、私たちはその風景もまた自分たちの手柄であるかのようにとらえているのだ。⁴

„wunderschön“ という形容詞は外見的美しさを表現するのみならず、中身が優れている場合にも使うことができるため、スイス人はアルプスの美しい風景と、スイスの国としてのすばらしさの両方に対するほめ言葉だと理解する。実際、スイスは第二次世界大戦後、小国でありながらもファシズムに対抗して中立を守りぬき、亡命者を受け入れた平和と人道主義の国として讃えられるのが常であった。このエッセイが書かれた約 30 年後、スイスも少なからず手を汚していたことが明るみに出るが、⁵ 平和な中立国スイスというイメージは今日でも基本的には変わっていない。この「国家と風景の一体化」について、ビクセルは次のように語っている。

戦時中、スイスはパラダイスだった。「スイス」は迫害された人々にとっては魔法の言葉であり、約束の地だった。苦しむ人々の目にスイスの風景は天国のように見えただろう。スイスという国家とスイスの風景は、彼らには渾然一体となっていたのである。そして自分たちの国家と風景が一体化していることを、私たちスイス人自身も確信しているのである。⁶

念である。

³ Peter Bichsel: Des Schweizers Schweiz. In: ders.: *Des Schweizers Schweiz*. Frankfurt/M: Suhrkamp, 1997, S. 10. ビクセル自身は戦後のスイスとスイス人の態度に対して批判的な態度をとっている。詳しくは拙論「ペーター・ビクセルのスイス論」、『DA』第 8 号 (2011) 所収、21-38 頁を参照されたい。

⁴ Bichsel, a. a. O., S. 10.

⁵ 1996 年に、ホロコーストの犠牲となったユダヤ人の休眠口座がスイスの銀行に多数残されていることが暴露され、国際的なスキャンダルになった。これを機に、当時のスイス政府は「独立専門家委員会スイス＝第二次大戦 (Die unabhängige Expertenkommission Schweiz - Zweiter Weltkrieg)」を立ち上げて 1996 年末から 2001 年にかけて徹底的な調査を行い、その結果は 25 巻からなる報告書にまとめられた。詳しくは黒澤隆文編『中立国スイスとナチズム』京都大学学術出版会、2010 年を参照。

⁶ Bichsel, a. a. O., S. 12f.

このようなコノテーションをもつアルプスの風景が描かれている例として、ビクセルのエッセイとほぼ同時期に公開されたアメリカ映画『サウンド・オブ・ミュージック』(*The Sound of Music*, 1965 年、ロバート・ワイズ監督)を挙げることができるだろう。オーストリア併合後、トラップ大佐一家がナチスの手を逃れて亡命に成功するシーンで終わるこの映画は、美しいアルプスの景色を映し出して、亡命先が人道主義の中立国スイスであることを示している。⁷

湖と山々を背景にした牧草地という、典型的なアルプスの風景が広がるリュトリで建国記念日を祝う習慣は、実は比較的新しいものである。1291 年 8 月 1 日を建国の日とする根拠となっているのは、原初 3 州が相互扶助の同盟を結んだ際に記された同盟誓約書 (Bundesbrief)⁸ なのだが、実際にはこの誓約書には「1291 年 8 月初旬」とのみ記されており、リュトリの地名には言及がない。⁹ 誓いの場所がリュトリであるという最初の記載は、オプヴァルデン (原初 3 州のひとつであるウンターヴァルデンの一部) の官吏ハンス・シュリーバー (Hans Schriber, 生没年不詳) によって作成された『ザルネン白書』(*Das Weisse Buch von Sarnen*, 1470-1472) に見られる。¹⁰ その後スイスの歴史家チューディ (Aegidius Tschudi, 1505-1572) によって書かれた『スイス年代記』(*Chronicon Helveticum*, 1532-1572) では、リュトリの誓いは 1307 年ということになっている。¹¹

1291 年の同盟誓約書がスイス建国の公的文書として認められるようになったのは 19 世紀末のことで、スイス連邦内閣 (Bundesrat) が同盟誓約書に基づいて 1891 年に建国 600 周年を祝ったことが決定的だった。さらに、連邦内閣が 8 月 1 日を建国の日と定めたのは 1899 年で、リュトリで記念式典が行われるようになったのはこの時からである。

現在、スイス連邦内閣のサイトに同盟誓約書に関する詳細な説明があるが、そこではリュトリの誓いは「伝説」(Legende) と説明されている。¹² また、1291 年の同盟誓約書はじ

⁷ この映画で描かれているように実際にザルツブルクから徒歩で山を越えると、スイスではなくドイツにたどり着いてしまうことは、映画ファンの間ではよく知られた事実である。つまり、この映画で描かれているのはあくまでも制作当時の国際社会における一般的なスイス・イメージなのである。

⁸ カントンの間でさまざまに取り交わされた同盟の誓約の文書 (Bündnisurkunden) を „Bundesbriefe“ という重々しい名称で呼ぶようになったのは 19 世紀末のことである。Vgl. Bernhard Stettler: Bundesbriefe. In: *Historisches Lexikon der Schweiz*. Online Ausgabe, 2010, <http://www.hls-dhs-dss.ch/textes/d/D9600.php> (Stand: 1. 2. 2019).

⁹ 1291 年の同盟誓約書のラテン語原文とドイツ語訳は、<https://www.admin.ch/gov/de/start/bundesrat/geschichte-des-bundesrats/bundesbrief-von-1291.html> (2019 年 2 月 1 日閲覧) を参照。

¹⁰ 『ザルネン白書』の現代語訳は、http://www.ow.ch/dl.php/de/5409b89275813/Text_und_Uebersetzung_Chronik_Weisses_Buch.PDF (2019 年 2 月 1 日閲覧) を参照。

¹¹ 『スイス年代記』が刊行されて広く読者を得られるようになったのは 1730 年代のことである。その後、盟約者団の成立は 1291 年か 1307 年かという論争が長く続くことになる。Vgl. François de Capitani: Wilhelm Tell. In: *Historisches Lexikon der Schweiz*. Online Ausgabe, 2013, <http://www.hls-dhs-dss.ch/textes/d/D17475.php> (Stand: 1. 2. 2019), Hans Stadler: Rütli. In: ebd., 2012, <http://www.hls-dhs-dss.ch/textes/d/D8794.php> (Stand: 1. 2. 2019).

¹² <https://www.admin.ch/gov/de/start/bundesrat/geschichte-des-bundesrats/bundesbrief-von-1291>.

め、数々の誓約書を所蔵する同盟誓約書博物館（Bundesbriefmuseum）でも、リュトリの誓いとそれにまつわるさまざまなエピソードは「神話」（Mythen）という扱いになっている。¹³ にもかかわらず、一般にはリュトリはやはりスイス発祥の地とみなされており、建国記念日の式典の会場をリュトリ以外の場所に移すという動きはない。史実かどうかということとは関係なく、リュトリは現代スイス人にとって盟約者団発足の誓いと分かちがたく結びついた記憶の場なのだが、その集合的記憶は19世紀に作り出されたものなのである。その際、ヴィルヘルム・テル（英語表記ではウィリアム・テル）の名を世界的に有名にしたシラー（Friedrich von Schiller, 1759-1805）の戯曲『ヴィルヘルム・テル』（*Wilhelm Tell*, 1804、以下『テル』と略記）が重要な役割を果たしたであろうことは容易に想像できる。『ザルネン白書』以来、¹⁴ リュトリの誓いとテルの物語はセットになって語られるものだからである。

本稿では、19世紀になってスイス人にリュトリの意味が意識され始める事情と、19世紀から20世紀にかけてアルプスを神話化し、またそれを脱神話化していく過程に文学作品がどのような形で関わってきたかについて概観する。個々の作品についてはより詳細な分析が必要であるが、それはまた稿を改めて行うことにする。

ところで、ルターのドイツ語訳聖書がグーテンベルクの印刷術によって普及したことと〈国民〉という意識の広がりとの関連について、アンダーソンは次のように指摘しているが、これは文学作品と集合的記憶との関係にも敷衍することが可能だろう。

第一に、もっとも重要なこととして挙げるべきは、出版語が、ラテン語の下位、口語俗語の上位に、交換とコミュニケーションの統一的な場を創造したことである。フランス語、英語、スペイン語といっても、口語はきわめて多様であり、これら多様なフランス口語、英口語、スペイン口語を話す者は、会話においては、おたがい理解するのが困難だったり、ときには不可能であったりするのだが、かれらは、印刷と紙によって相互理解できるようになった。[…] 出版によって結びつけられたこれらの読者同胞は、こうして、その世俗的で、特定で、可視的な不可視性において、国民的なものと想像される共同体の胚を形成したのである。¹⁵

「可視的な不可視性」は本稿の文脈では、ドイツ語で書かれたテキストに基づく集合的記憶と読みかえることができるだろう。きわめて多様な方言（Mundart、直訳すればまさに口語）をもつドイツ語圏スイスにおいて、シラーの標準ドイツ語（Schriftdeutsch、書き言葉＝出版語としてのドイツ語）が果たした役割も看過できない。

html (Stand: 1. 2. 2019).

¹³ <http://www.bundesbrief.ch/de.html/3> (Stand: 1. 2. 2019).

¹⁴ 『ザルネン白書』に初めてテルについての言及が見られる。

¹⁵ ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』白石隆、白石さや訳、リブロポート、1987年、80頁。

先に引用したビクセルをはじめ、チューリヒ出身のマックス・フリッシュ (Max Frisch, 1911-1991) や、ベルン出身のフリードリヒ・デュレンマツ (Friedrich Dürrenmatt, 1921-1990) といった 20 世紀のドイツ語圏スイスの文学を代表する作家たちの作品のかなりの部分が、シラーの『テル』の影響とリュトリをめぐる言説という文脈に置いたときに初めてよりよく理解されるものである点を示すことも、本稿の狙いのひとつである。

2

周知のとおり、風景は「発見」されるものである。¹⁶ それまで大地の醜い吹き出物という扱いを受け、異界として恐怖の対象でもあったアルプスが、美しく崇高なものとしてとらえられるようになったのは 18 世紀になってからだった。イギリス式庭園の美学が山岳風景を美しいものとして受け入れる土台となっただけで、アルプスに崇高な美を見出すという感性の発達に決定的な影響を与えたのが、ベルン出身のハラー (Albrecht von Haller, 1708-1777) の長編詩『アルプス』(Die Aplen, 1729) とジュネーヴ出身¹⁷のルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) の小説『新エロイズ』(Julie ou la Nouvelle Héloïse, 1761) だったことはよく知られている。この時期、観光も急速に発展し、特にイギリスで貴族の子弟が教育の仕上げにイタリアを最終目的地として大陸を旅行するグランド・ツァーが流行して、アルプスを体験するイギリス人が急増する。¹⁸ このスイス旅行熱はヨーロッパじゅうに広まり、こうして、長らく交通を妨げる障害物とみなされ、回避されてきた山岳地帯が、崇高な美を求めてわざわざ出かけて行く場所となる。スイスの評価も辺境の地から人気の観光地へと変化して、今日に至る。

アルプス体験は紀行文その他、さまざまな文学作品を生み出していく。¹⁹ ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) も 1775 年、1779-80 年、1797 年の 3 度にわたりスイスを旅

¹⁶ たとえば瓜田は、明治期の日本における風景の「発見」について次のように述べている。「当時の日本人にとっては、彼らの生活をとりまく『環境』は存在したが——そして、生活をしていくために、この環境に対しては彼らは詳しい知識をもっていた——、『風景』そのものは、いまだ、幕末から明治時代にかけて居留地に進出してきた欧米人に教えてもらうまでは存在しなかった。」瓜田澄夫「ビクチャレスク美学における山岳表象について」、『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』第 3 号 (2006) 所収、93 頁。今では普通に用いられている「日本アルプス」という名称そのものが、日本の風景がヨーロッパの風景の見立てとして「発見」されたことをよく示している。蓼科高原には「ピラタス」という名前のスキー場があるが、これはルツェルン近郊にあるピラトゥス山にちなんでいるし、岡山県牛窓町から望む瀬戸内海の風景は「日本のエーゲ海」と呼ばれる。

¹⁷ 当時のジュネーヴは独立した都市国家 (ジュネーヴ共和国) だった。ジュネーヴが盟約者団に加わるのは 1815 年のことである。

¹⁸ 18 世紀から 19 世紀にかけてのイギリスにおけるアルプス体験の流行と文学との関わりについては、鈴木雅光「ロマン派詩人とアルプス」、藤田崇夫・鈴木繁幸・松倉信幸編『英語と英語教育の眺望』DTP 出版、2010 年所収、275-286 頁を参照。

¹⁹ 18 世紀のドイツにおけるアルプス体験と文学の関係については、Richard Weiss: *Das Alpenlebnis in der deutschen Literatur des 18. Jahrhunderts*. Horgen-Zürich, Leipzig: Münster-Presse, 1933 が重要な基本文献である。

行し、2度のイタリア旅行（1786-88年、1790年）の際にもスイスに立ち寄って、詩や紀行文など、さまざまなテキストを書き遺している。²⁰ 記憶の場としてのリュトリという文脈でゲーテとスイスとの関わりを見たときに最も重要なのは、テルの伝説をもとに文学作品を創作しようとしたのが、もともとはゲーテだったということだろう。彼は『スイス盟約者団の歴史』（*Der Geschichten der schweizerischen Eidgenossenschaft*, 1786-1808）を著したスイス人歴史家で政治家でもあったヨハネス・フォン・ミュラー（Johannes von Müller, 1752-1809）とも親交を結んでいる。生き生きとした物語調で語られるミュラーのこの著作は、スイス国外にも多くの読者を得て、スイスの歴史を広く知らしめることになった。²¹ ゲーテは長い年月をかけて資料を収集したが、結局作品化には至らず、シラーにゆだねることになった。その資料の中にはミュラーの著作の他、チューディの『スイス年代記』もあり、シラーはチューディの記述に忠実にリュトリの誓いとテルの伝説を再現している。

シラーが『テル』を執筆したのは1803年から1804年にかけてのことで、その直前にはスイスを取り巻く政治情勢が大きく変化していた。1798年に盟約者団がナポレオン軍との戦いに敗れ、フランスの干渉と指導のもとにヘルヴェティア共和国という中央集権的な国家が成立したのである。これはヨーロッパ中の人々に、自分たちがこよなく愛するあの美しいアルプスの国スイスの自由がこの世から消えてしまったと思わせる出来事だった。シラーのこの戯曲には美しい自然描写がちりばめられているが、シラーは実際にはスイスを訪れたことはないで、この作品の自然描写は当時のプロトタイプ的なアルプスの風景をもとにしていると考えられる。シラーは当時のスイス・ブームをうまく利用して、他国による圧政に対抗して自国の自由と独立を守ったテルの伝説にアクチュアルな時事問題を重ね合わせたのである。

スイス国内ではテルの物語は、民衆演劇を通じて16世紀には広く知られていた。テル劇として最も古いテキストが残っているのは、1512年に謝肉祭劇として演じられた『ウルナー・テル劇』*Urner Tellspiel*で、18世紀までに12の版が残されている。²² 16世紀にはテルにまつわるさまざまな記念碑も建てられた。たとえば、テルが悪代官グズラーに捕えられて乗せられた船から飛び降りた岩場とされる場所にテル礼拝堂が建てられたのが16世紀初頭

²⁰ スイス・ゲーテ協会（Goethe-Gesellschaft Schweiz）は「ゲーテとスイス」というテーマと重点的に取り組んでいる。Vgl. <http://www.goethe-gesellschaft.ch/goetheschweiz.html> (Stand: 1. 2. 2019). たとえばシュタイガーは、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（*Wilhelm Meisters Lehrjahre*, 1795/96）で少女ミニヨンがイタリアへの憧憬を込めて歌う、有名な「君よ知るや南の国」の詩が書かれたのは2度目のスイス旅行の後、まだイタリアを知る前の1782/83年だったことから、この詩にはすでに見たことのあるスイスの山岳風景（特に第3連で歌われている）と想像上のイタリアの風景が絶妙に混じり合っていると解釈している。Vgl. Robert Steiger: *Goethes drei Reisen durch die Schweiz*. <http://www.goethe-gesellschaft.ch/schweizerreisen.html> (Stand: 1. 2. 2019). また、ゲーテがスイス旅行に関連して書いた文章は、日本では木村直司によって1冊の書物（ゲーテ『スイス紀行』木村直司編訳、筑摩書房、2011年）にまとめられている。

²¹ Vgl. André Weibel: Johannes von Müller. In: *Historisches Lexikon der Schweiz*. Online Ausgabe, 2011, <http://www.hls-dhs-dss.ch/textes/d/D16568.php> (Stand: 1. 2. 2019).

²² Vgl. François de Capitani: *Wilhelm Tell*. In: a. a. O.

のことで、テルが住んでいたとされる場所には 1582 年にやはり礼拝堂が建てられている。息子の頭の上にのせたりんごを射抜いた場所とされるアルトドルフに記念碑が建てられたのは 1583 年のことだった。(ちなみに、現在テルの記念碑として最も有名なアルトドルフの銅像は 1895 年に建てられたものである。) リュトリは 18 世紀には保守派や愛国主義者たちにナショナル・アイデンティティの拠り所とみなされて巡礼地になっていたが、そこに記念碑を建てるという計画は、1780 年と 1789 年のいずれも失敗している。

シラーの『テル』はゲーテの演出により 1804 年 3 月にワイマールで初演されて大成功を収め、スイスでも同年 11 月にルツェルンで上演されている。フランス革命期には自由の闘士で革命の先駆者としてイメージされることもあったテルが、シラーの戯曲では自分たちと同じような庶民で、実直な山の住民として描かれていることをスイス人は歓迎したようである。²³ 現在、毎年上演されることで有名なアルトドルフのテル劇は 1899 年、インターラーケンのテル劇は 1912 年に始まったもので、いずれもシラーの戯曲が上演されている。こうして、スイスの地に一度も足を踏み入れたことのないシラーが書いた『テル』は、スイスの国民的演劇とみなされるようになる。実際、リュトリの周辺に初めて建てられた記念碑もシラーに関係するもので、シラー生誕 100 周年を記念してウルナー湖にそそり立つ天然の石柱に「テルを歌った詩人 F. シラーに捧ぐ 原初カントン 1859 年」という文字が彫り込まれた。

アルプスの風景が「発見」されて以降、スイス人作家がアルプスを舞台にして書いた物語の中で最も有名なのは、ヨハンナ・シュピーリ (Johanna Spyri, 1827-1901) の『ハイジの修業時代と遍歴時代』(*Heidis Lehr- und Wanderjahre*, 1880) と『ハイジは習ったことを役立てる』(*Heidi kann brauchen, was es gelernt hat*, 1881) だろう。²⁴ この連作は日本ではひとつにまとめられ、『アルプスの少女ハイジ』のタイトルで広く知られている。何度も映画化され、アニメ化もされて広く親しまれている児童文学で、今日世界中の人々がスイスと聞いてまず思い浮かべるのはハイジの世界だと言っても過言ではあるまい。原作はタイトルからもわかる通り、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』を強く意識した作品で、キリスト教精神に基づく教養小説という体裁をとっている。この作品ではスイスの大自然は、ドイツの都市(金融の中心地で、ゲーテの生地でもあるフランクフルト)と対比されることによって理想化されている。すなわち、アルプスの村の貧しい家庭では幸せで健康だったハイジは、ドイツの都会の裕福な家庭ではストレスのあまり夢遊病になり、フランクフルトで足が不自由だったクララは、アルプスの大自然の中で癒されて歩けるようになるのである。子どもた

²³ Vgl. ebd. リュトリで誓いを立てたのは原初 3 州の代表者であり、テルはそこに含まれていない。リュトリの誓いという出来事からすると、テルは完全な脇役である。

²⁴ 「ハイジの物語は疑いもなくスイスの国民神話だ。この物語はスイス文化に固有のものとされる価値観を伝えているし、この物語を読めばスイス人はそこに自分自身の姿を見出すからだ。そんなにもスイスという国に強く結びついているにもかかわらず、世界各国で受容されて幅広い成功を収めたために、この神話は普遍的なものになった。」ジャン＝ミシェル・ヴィスメール『ハイジ神話——世界を征服した「アルプスの少女」——』川島隆記、晃洋書房、2015 年、5 頁。

ちの成長を見守る無骨だが実直なおじいさんは、ヴィルヘルム・テルの流れをくむ典型的な山の住民である。この作品で描かれているのは、神話化されたアルプスそのものであると言えるだろう。

19 世紀後半、子どもの教育という観点では、リュトリについてスイスの子どもたちに学ばせることも重要な課題だった。1896 年の教師向け雑誌に、主に 4 年生向けとして愛国主義的な「リュトリの歌」(Rütlilied) を使った授業の教案が掲載されている。²⁵

3

20 世紀になり、隣国ドイツでナチスが力を持ち始めると、スイスでは精神的国土防衛 (Geistige Landesverteidigung) の一環として『テル』がさかんに上演されるようになる。精神的国土防衛とは、全体主義的なイデオロギーに対抗して＜スイスのなもの＞を守るために 1930 年代から民間レベルで繰り広げられた種々多様な運動の総称である。これが国策として公的な色合いを帯びるようになったのは、1938 年 12 月 9 日にいわゆる「文化教書」がスイス連邦議会に提出されてからのことだった。これは当時の連邦閣僚フィリップ・エッター (Phillip Etter, 1891-1977) が中心となって作成した連邦内閣報告書で、「精神的国土防衛のマグナ・カルタ」とも呼ばれている。²⁶ この教書では、スイスの国土防衛が軍事的・経済的に行われるのみならず精神的にも行われなければならない理由について、次のように述べられている。

スイスの国家思想は人種から生まれたものでも、肉体から生まれたものでもなく、精神 (Geist) から生まれたものである。土地を分ける山であり、結びつける峠でもあるゴットハルトの周辺地域で、ひとつの並はずれて偉大な理念の受肉、つまり国家の誕生を祝うことができたというのは、なんとすばらしく記念すべきことだろうか。その偉大な理念とは、ヨーロッパ的かつ普遍的な理念、すなわち、諸民族と西洋諸文化による精神的共同体という理念である。²⁷

異なる言語と文化をもつ複数のカントンの住民を結びつけているのは、「人種」や民族などの血のつながりではなく「理念」である、という点を教書が強調している背景にはもちろん、ナチス・ドイツの自民族中心主義的な「血と大地」のイデオロギーが存在する。この時期、

²⁵ Vgl. L. Suito: Das Rütlilied. Präparation. In: *Pädagogische Blätter: Organ des Vereins kathol. Lehrer und Schulmänner der Schweiz*, Bd. 3 (1896), Heft 4, S. 115-117. 「リュトリの歌」の作詞はクラウアー (Johann Georg Krauer, 1792-1845)、作曲はグライツ (Franz Joseph Greith, 1799-1869) による。

²⁶ 「文化教書」についての詳細は、葉柳和則「テキストとしての「文化教書」(1938)——ナチス時代のスイスにおける「精神的国土防衛」運動の理路」、『インターカルチュラル』(日本国際文化学会年報) 16号 (2018)、99-114頁を参照。

²⁷ Bundesrat der Schweizerischen Eidgenossenschaft: Botschaft des Bundesrates an die Bundesversammlung über die Organisation und die Aufgaben der schweizerischen Kulturwahrung und Kulturwerbung vom 9. Dezember 1938. In: *Bundesblatt*. Nr. 50, 90. Jahrgang, Band 2, 14. Dez. 1938, S. 999. 強調は原著者による。

そのようなスイスの「精神」を象徴するものとして、1291年に成立した盟約者団への言及が頻繁に見られる。上に引用した「文化教書」にも原初3州の換喩として「ゴットハルトの周辺地域」という表現がある。

第二次世界大戦中に国民的な記憶の場としてのリュトリを利用した最も有名な例は、ギザン将軍 (Henri Guisan, 1874-1960) が1940年7月25日に行った、いわゆる「リュトリ演説」(Rütlirapport) だろう。フランスがナチス・ドイツに降伏し、スイスが四方を敵国に囲まれてしまうことになったこの年、当時スイス軍の最高司令官だったギザン将軍は少佐以上の軍の幹部をリュトリの野に召集し、ナチスへの徹底抗戦を訴えたのである。彼が提唱した戦略はレデュイ・プラン (Réduit-Plan) と呼ばれ、アルプスに軍隊を集結させてナチス軍と徹底的に戦うというものだった。ギザン将軍はその上で、万一スイスの敗北が明らかになったときにはゴットハルトとシンプロンの二大トンネルを爆破することを予告したのだった。これらのトンネルはドイツとイタリアをつなぐ重要なルートだったのでこういう脅迫の仕方になっているのだが、この演説が行われたリュトリ、軍隊が終結するアルプス、爆破予告されたトンネルのゴットハルトという3つの地名を並べてみたとき、すべてのベクトルが盟約者団の伝統を指し示していることは明らかだろう。ハプスブルクの圧政に抗して自由と独立を守り抜いたように、今度もまたナチス・ドイツの脅威に抗して自由と独立を守り抜こう、というわけである。ギザン将軍が将校たちとともにリュトリの野に立ったとき、スイス人の多くは自分たちを原初3州の人々に重ね合わせ、自分たちがテルの末裔であることを強く意識したに違いない。戦後、スイスがヒトラーの侵略を免れたのはギザン将軍と彼が率いたスイス軍のおかげであるという神話が誕生し、ギザン将軍は国民的英雄となった。

このような状況の中で、繰り返しシラーの『テル』が上演されたのも当然のことだろう。オスカー・ヴェルターリン (Oskar Walterlin, 1895-1961) が総監督に就任した1938年から1945年の終戦まで、チューリヒ劇場で『テル』は定番の演目として途切れることなく上演され続けた。²⁸ 興味深いのは、その同じ『テル』がナチス・ドイツでも好んで上演され、1933年の政権掌握から1941年までプロパガンダに利用されていたことである。²⁹ リュトリの誓いに先立つ「祖国 (Vaterland) に、かけがえのない祖国に身を結びつけ／全霊を込めて祖国を支えよ／そこにこそお前の力の強い源があるのだ」(第2幕第1場) というウーリの代表者アッティングハウゼンのせりふや、「われわれがこの土地を作ったのだ／自分たちの手で勤勉に働いて／熊が住むような太古の森を／人間の住処へと変えたのだ [...] 千年来所有するこの土地はわれわれのものだ」(第2幕第2場) というシュヴィーツの代表者シュタウファハーのせりふは、国民意識の高揚にうってつけだった。

²⁸ Vgl. Günter Schoop: *Das Zürcher Schauspielhaus im zweiten Weltkrieg*. Zürich: Oprecht, 1957, S. 214-224.

²⁹ ナチス政権下でのドイツでの『テル』上演については、中村靖子「テル神話解体を試みるフリッシュのスイス像」、葉柳和則編『チューリヒ劇場と文化の政治』(日本独文学会研究叢書 117号)、2016年所収、73-75頁を参照。

1938年にスイス人神学生モーリス・バヴォー（Maurice Bavaud, 1916-1941）がヒトラーを射殺しようとしたことに始まる一連の暗殺未遂事件やクーデター計画があり、1941年6月3日にドイツでは『テル』の上演が禁じられることになる。これに関連して、ヒトラーの次のような言葉が伝えられている。

これまでドイツ皇帝の話を書こうとした劇作家がいないという点で、われわれは不運だ。よりにもよってシラーがスイスの狙撃兵を美化しなければならなかったとは。イギリスにはシェイクスピアがいるが、やつらの歴史に登場するのは暴君か役立たずばかりだ。³⁰

一方、チューリヒ劇場は主にベルリンから逃れてきた「反ファシズム亡命芸術家の砦」³¹ となつて、「亡命者・ユダヤ人・マルクス主義者劇場」³² と呼ばれた。³³ そのチューリヒでテルを演じたらこの人と言われたスイス人俳優がハインリヒ・グレートラー（Heinrich Gretler, 1897-1977）だった。彼は1927年から1933年にかけて、ベルリンのさまざまな舞台に立った経験の持ち主だったが、ヒトラーが政権を握った2ヶ月後にドイツ劇場で上演された『テル』のリュトリの誓いのシーンで、俳優たちが誓いのジェスチャーの代わりにナチス式の挨拶をしたことによってドイツに嫌気がさし、スイスに帰国した。³⁴ スイスでは無名に近かったグレートラーを国民的俳優の地位に押し上げたのは、1938年に『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』（*Götz von Berlichingen*, 1773）、『賢者ナータン』（*Nathan der Weise*, 1779）、『テル』という古典的3作品でそれぞれタイトル・ロールを演じたことだった。ドイツからの亡命者に囲まれて演じるスイス人俳優の存在が、ナチス・ドイツに立ち向かい、祖国の自由と独立を守ろうとするスイス、あるいはナチス・ドイツに迫害を受けるユダヤ人に対して寛容なスイスという寓意的解釈を明確にしたのだった。³⁵

³⁰ Nikolas Martin (Hg.): *Schiller: National Poet - Poet of Nations*. Amsterdam, New York: Edition Rodopi, 2006, S. 286. 相手が暴君であったにせよ、テルが殺人者であることを問題視する声は啓蒙時代からあった。現在ではテルをテロリストに見立てる考え方もある。https://www.swissinfo.ch/ger/tell-im-ausland--freiheitssymbol-oder-terrorist-/628554 (Stand: 1. 2. 2019).

³¹ Werner Mittenzwei: *Exil in der Schweiz*. 2. verbesserte und erweiterte Auflage. Leipzig: Reclam, 1981, S. 377.

³² Max Frisch: Rede zum Züricher Debakel (1969). In: ders.: *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge*. Hrsg. von Hans Mayer unter Mitwirkung von Walter Schmitz. Frankfurt/M: Suhrkamp, 1998, Bd. 6, S. 500.

³³ チューリヒ劇場はスイスにとつてのもうひとつの国民的記憶の場である。葉柳和則「チューリヒ劇場と精神的国土防衛」、葉柳和則編『チューリヒ劇場と文化の政治』（日本独文学会研究叢書 117 号）、2016 年所収、7 頁参照。

³⁴ Vgl. Werner Wollenberger: *Heiri Gretler. Der grosse Schweizer Schauspieler*. Zürich: Pendo, 1978, S. 66. リュトリの誓いで 3 本の指を立てた手を挙げる身振りが簡単にナチス式の挨拶に変わってしまうことは、21 世紀に入って建国記念日の式典にスイスの右翼（ネオナチ）が集まるようになった現象を見ることができる。

³⁵ Vgl. ebd., S.89f.

冒頭でも述べたように、戦後のスイスには自由と独立を守り通した自国を「非常に美しい国」とみなし、ギザン將軍を英雄視する風潮がある一方で、そのような考え方に批判的な目を向ける人々もいた。たとえば、大戦中に「精神的抵抗のシンボル」³⁶と呼ばれたグレートラーは、そのような存在であることを嫌って1947年にチューリヒ劇場を去り、活動の場を舞台から映画に移して、あえて必ずしも主役ではない雑多な役をこなしている。あるいは、作家ビクセルは冒頭でも引用した1967年のエッセイの中で次のように述べている。

私たちの国はできてから 120 年か、せいぜい 150 年くらいしか経っていない。それ以外のすべては前史であり、国境線とは関係があるかもしれないが、私たちが今暮らしているこの国とはほとんど関係がない。[...] けれども 1848 年の人々には後継者がいない。誰も 1848 年を抛り所にしようとしな。スイス人は相も変わらず 1291 年の精神を引き合いに出す。私たちは相も変わらずテルを頼りにしている。³⁷

スイスはナポレオンの失脚後、ウィーン会議で国際的に中立国であることが認められ、1848年に制定された憲法によって連邦制が採択されて、近代スイスの基盤が確立した。ビクセルは、現在のスイスの礎となっているのが 1291 年のリュトリの誓いではなく、中央集権的なヘルヴェティア共和国に代わって連邦国家が誕生した 1848 年であるのに、スイス人が相変わらずリュトリとテルのことばかり持ち出すのを嘆いているのである。

シラーの『テル』劇が成立して以来、スイスの作家は——19 世紀にはゴットヘルフ (Jeremias Gotthelf, 1797-1854)、ケラー (Gottfried Keller, 1819-1890)、C. F. マイヤー (Conrad Ferdinand Meyer, 1825-1898) のような逸材が輩出したにもかかわらず——誰もテルを題材にした作品を書こうとしなかったが、フリッシュがそのタブーを破って『学校のためのヴィルヘルム・テル』(Wilhelm Tell für die Schule, 1971) を執筆する。「学校のための」とわざわざ断っているのは、戦後チューリヒ劇場で学校向けにシラーの『テル』を上演することが義務づけられていたからである。³⁸ フリッシュは『テル』のプロットをなぞりながら、それを異化する注釈を加えるという手法で、『テル』の脱神話化を図った。³⁹ 同様に、ビクセルもシラーの『テル』について批判的な態度をとっている。

³⁶ Vgl. ebd., S. 18.

³⁷ Peter Bichsel: *Des Schweizers Schweiz*. In: a.a.O., S.16f.

³⁸ 1969年まで『テル』の学校向け公演が義務づけられており、このような義務化はチューリヒ劇場が国民の教育の場としての役割を担っていたことを示している。中村靖子「テル神話解体を試みるフリッシュのスイス像」、葉柳和則編『チューリヒ劇場と文化の政治』(日本独文学会研究叢書117号)、2016年所収、75頁参照。

³⁹ 同上、77 頁参照。フリッシュの『学校のためのヴィルヘルム・テル』については、中村靖子「「歴史叙述の実験室」——M・フリッシュの『テル』が示す「接続法的空間」」、大阪大学ドイツ文学会編『独文学報』第24号(2008)所収、219-244 頁も参照のこと。

祖国に関する事柄で私たちがよく勘違いをするのはもしかしたら、祖国に関することを私たちの話し言葉（Mundart）ではなく、シラーの言葉——私たちはそれを書き言葉（Schriftdeutsch）と名付けているのだが——で表現する習慣があるからかもしれない。私たちの英雄が語る偉大な言葉を話し言葉に翻訳すれば、その嘘が明らかになる。⁴⁰

シラーの『テル』は外から押し付けられたスイス人の自己イメージであり、スイス人は借り物の言葉で自国について語っている、とピクセルは主張しているのである。

デュレンマットは外から押し付けられたもうひとつのスイス・イメージとしてのアルプス神話に抵抗する。たとえば、劇作家としてのデビュー作『聖書に曰く』（*Es steht geschrieben*, 1947）で、16 世紀にドイツ北西部の都市ミュンスターに出現した再洗礼派王国を題材にして、第三帝国を彷彿とさせるような集団の狂気を描きつつ、その舞台をいつの間にかミュンスターからアルプスに移すことによって、スイスをナチス・ドイツに重ね合わせている。⁴¹あるいは、短編小説『トンネル』（*Der Tunnel*, 1952）で、牧歌的なスイスの風景の中に突如、地獄へと通じるトンネルを出現させ、そこに主人公の乗った列車が突進し、墜落してゆくさまを描く。喜劇『老貴婦人の訪問』（*Der Besuch der alten Dame*, 1956）のもとになった短編小説『月食』（*Mondfinsternis*, 1981）⁴²では、アルプスの小さな村の住民たちが大金と引き換えに殺人を請け負う守銭奴ぶり、道徳的墮落ぶりを描くことによって、『アルプスの少女ハイジ』で理想化されたスイスの農民の脱神話化を図っている。

記憶の場としてのリュトリという本稿のテーマにとって最も興味深いデュレンマット作品は、『チベットの冬戦争』（*Der Winterkrieg in Tibet*, 1981）⁴³ だろう。このディストピア小説で一人称の語り手は、傭兵（スイス人男性の伝統的な職業である）として第三次世界大戦後にもなおチベットの山奥で続けられている戦闘に参加している。山岳地帯に掘られた地下道の中で行われている戦闘は困難を極めるが、それは味方と敵の区別がつかないからである。物語が進むにつれて、そもそも敵が存在するのかどうかもあいまいになっていく。物語の舞台がスイス・アルプスではなくチベットになってはいるものの、この小説が第二次大戦中にギザン将軍が「リュトリ演説」の中で提唱したレデュイ・プランの一種のパロディになっていることは明らかだろう。

⁴⁰ Peter Bichsel: *Des Schweizers Schweiz*. In: a.a.O., S.18.

⁴¹ ヒトラーと二重写しになっている再洗礼派の王ボッケルソンが、その餌食になるミュンスター市長に対して次のように呼びかけるシーンがある。「おまえの谷にいる石の山羊たちがメーメーと鳴くのが聞こえる。おまえのアルプスにいる牛がモーモーと鳴くのが聞こえる！ 私は腹をゆすり、尻を振り、腕をぶらぶらさせるのだ。」Friedrich Dürrenmatt: *Es steht geschrieben. Ein Drama*. In: ders.: *Werkausgabe in 37 Bänden*. Zürich: Diogenes, 1998, Bd. 1, S. 138. 翻訳は山本佳樹による。デュレンマット『聖書に曰く』山本佳樹訳、『デュレンマット戯曲集』第1巻、鳥影社、2012年所収、140頁。

⁴² 執筆が開始されたのは50年代だが1978年に大幅に書き直され、晩年の自伝的散文作品『迷宮 素材 I-III』（*Labyrinth. Stoffe I-III*, 1981）の中に収められている。

⁴³ 1944年に着手したが完成させられなかった作品として、『迷宮 素材 I-III』（*Labyrinth. Stoffe I-III*, 1981）の中で再構築されている。

2004 年 7 月、初演 200 周年を記念してシラーの『テル』がワイマール国立劇場の客演によってリュトリで上演された。夕刻から始まる野外公演の様子について、「スイスインフォ」(Swissinfo) ⁴⁴は次のように伝えている。

オリジナルではリュトリの丘を舞台にしたシーンは非常に少ない。しかし、「ウイリアム・テル」の上演にこれほどお似合いの環境はないだろう。野外で緑の芝生に覆われた舞台の背景に青々としたセーリスベルク山とエメラルド色のフィアヴァルトシュテッテ湖が見える。これまで、毎年「ウイリアム・テル」は上演されてきたが、リュトリの丘での上演は初めてである。⁴⁵

この文章に見られるのは相変わらず、リュトリという記憶の場と神話化されたアルプスの風景の典型的な結びつきである。『テル』の初演 200 周年を記念する公演がリュトリで行われたということ、あるいはその情報が上に引用したような表現でスイスの公的機関からいまだに発信され続けているという事実は、戦後グレートラーがどんな役を演じようとも死ぬまでテルの俳優、スイスの国民的俳優と呼ばれ続けたように、フリッシュやデュレンマットの脱神話化の試みはスイス人の怒りを買うことはあっても、一般的な自己理解を変えるまでには至らなかったことを示していると言えるだろう。

⁴⁴ スイスの公共放送である「スイス放送協会」(Schweizerische Radio- und Fernsehgesellschaft)が運営するウェブサイトで、スイスのニュースや情報を国外向けに発信している。

⁴⁵ <https://www.swissinfo.ch/jpn/%E3%82%A6%E3%82%A4%E3%83%AA%E3%82%A2%E3%83%A0-%E3%83%86%E3%83%AB%E4%B8%8A%E6%BC%94200%E5%B9%B4%E8%A8%98%E5%BF%B5/4013942> (日本語サイト、2019 年 2 月 1 日閲覧)